

人の心を
なごめやう
くれおまわと
するやう
りてむくいを
もとめぬやう
新平

第16回後藤新平賞 受賞講演より

公益財団法人日本フィルハーモニー交響楽団
理事長 平井俊邦

「被災地に音楽を」—活動をつづけて11年—

1. 人々の祈り・思い
2. 「音楽家に何ができるか」を問いつづけ
3. 音楽でつながり、心揺さぶられ、可能性を見つける
4. 「東北の夢プロジェクト」の創設
5. コロナ禍を経て

「被災地に音楽を」—活動をつづけて11年—

1. 人々の祈り・思い

2011年3月11日 東日本大震災。

日本フィルはサントリーホールで、その当日と翌日に東京定期演奏会を予定、その4日後に「香港アートフェスティバル」参加のため出国予定でした。

ゲネプロの44分前に震災に遭遇しましたが、関係者全員とホール建物の安全が確認されたので、この上は、しっかりした音楽を提供でき、お客様が安全に1人でも来場されれば開催すると決断しました。当日夜は77名、翌日昼は758名もの方が混乱の中でもおいで下さいました。

未曾有の大災害。テレビで昼夜その惨状が報道され、「あまりにもひどい。自分はどうしたらよいのか。何か出来ることはないのか」そのような思いを多くの方々が抱きながら演奏会へおいでになったようでした。指揮者、ソリスト、楽団員、お客様が一体となって、祈りを込めた音楽がホール全体に満ち、独特の演奏会となりました。



そして4日後には香港へ出発。公演の開始前に当時の島田晴雄理事長は次のようなメッセージで会場の聴衆に訴えました。

「私たちが香港に来て皆様にお会いしているのは、音楽は特別な力を持っているというメッセージをお届けしたかったからです。音楽の持つコミュニケーションの力、慰めの力、励ましの力、歓喜の力、希望の力、さらには、生きることの意味を、皆様とともに分かち合いたいと思うのです。日本はこの災害に決して負けません。どうぞ近い将来、日本へおいで下さい。さらに感動的な演奏で皆様をお迎えいたします。」

犠牲者へ黙とうをささげたのちの、楽団員渾身の演奏に、会場全体に拍手と涙、温かい熱気の中で興奮が高まっていくような、全く未知の感動を得たのです。

大震災の日から香港公演までの、厳しい環境での演奏活動は、楽団員にとって人々の思いをしっかりと受け止める機会となりました。

2. 「音楽家に何が出来るか」を問いつづけ

東京に戻った日本フィルを待っていたのは厳しい財政、経営状態の現実でした。

大震災のため6公演が中止。その上、リーマンショックの悪影響、一部助成金の打ち切り等があり、2010年度は131百万円の赤字決算。債務超過を解消するという目標が一転増加に。公益財団法人移行に赤信号が灯りました。

このような状況ではありましたが、被災された人々への思いを音楽に変えて直接お届けしたい。お金でもない、労力提供でもない、物でもない、“音楽家に何が出来るか”を問い続け、余裕資金はありませんが、阪神淡路大震災では1年間支援活動をした経験がある、日本フィル。

被災地支援は使命であると考え、「みなさまの心を音楽に変えて日本フィルがお届けします」と4月より社会に訴えました。9月末迄の寄付総額は6.5百万円にのぼり、これを原資に4月から約半年間で42公演延べ114名の楽団員とスタッフが現地を訪れました。その後は企業の支援も入り、今日まで続けられています。

●避難所生活に“音楽を届ける”

震災直後の半年は避難所を生活の場とする人々に音楽を届けることが中心となりました。4月6日、原発から10kmの太平洋に接する町、福島県浪江町の方々が身を寄せていた、福島県二本松の避難所に香港の企業から託された「乾電池」を届ける目的で、併せて可能な演奏をと、トロンボーン・ヴァイオリン・ヴィオラ奏者の3名が日帰りで訪問しました。これが「被災地に音楽を」活動のスタートとなりました。



当日の心境を当時首席ヴィオラ奏者の後藤朋俊はこのように述べています。

「あれほど演奏するのが怖い気持ちになったのは初めてでした。よく晴れた青空とは反対に、こんな時に音楽を本当にして良いのだろうか、と正直思いました。音を出すこと自体が罪に感じられるほど、避難所はあまりにも静かだったのです。演奏後に80才ほどのおじいさんが、音楽を聴いてこんなに涙したことはない、こんな想いは生まれて初めてだったと声をかけてくださいました。この方はどういう心境で音楽を聴いてくださったのか。音楽がなかった方がかえって良かったのだろうかと考えたりもして複雑な心境になりました。音楽の無力さを感じました。」

この時、避難所の中に足を踏み入れる状況では全くなく、玄関前で演奏を開始。次第に人々が集まってきたのだと報告されています。

原発事故関連では、浪江町その他、大熊町・双葉町・富岡町・飯館村・南相馬市の方々が避難している会津若松・埼玉県加須・三春・二本松・南相馬市の避難所を訪問しました。津波関連の避難所ないし施設としては、名取市・気仙沼市・石巻市・釜石市・大船渡市・花巻市・東松島市・仙台市・いわき市・陸前高田市・久慈市、志津川高校等の避難所・施設を訪問しました。



（愛とヒューマンコンサート／鎮魂の野外コンサート・名取市・気仙沼市・石巻市 松本克己）松本はオウム真理教に殺害された坂本弁護士一家の墓前で毎年演奏しています。松本克己が名取市の避難所で感じた事。

「演奏中にすごい雷雨。聴いていたお母さんが「この雷と雨は、亡くなった方々の喜びの涙だ」と。息子さんは避難所でなくなったそうです。彼女は悲しみの涙ではなく、感激の涙だと表現し、こんな感動をありがとう、とってくれた事、本当に励みになりました。悲しくても2ヶ月間涙を流したことがないという人が沢山いらっしゃいました。みんないろいろな悲しみをもって耐えている。音が聴こえたことによって心が開かれて涙がとめどなく出る。「2ヶ月分の涙を流して良かった」「すごく気持ちが軽くなった」「生きていてよかったんだ」「お父さん、私もう少しこっちで頑張るね」との前向きな言葉を聞いて、これが音楽の力なのかと思いました。

大震災直後、被災者は家族や友人、住居、職を失うことにより心に大きな痛手を受けていました。“被災地に音楽を”の活動に一番求められていたものは“住民の心のケア”であった事が後日の調査で裏打ちされました。

● 仮設住宅・災害復興住宅の生活に“音楽を届ける”

被災地では、避難所から仮設住宅へ、その後、仮設住宅の再編や災害復興住宅への入居、高台移転地への転居など、被災者や地域住民の生活環境が再度大きく変化して行きました。

★映像:2012年5月21日宮城県登米第二仮設住宅（南三陸町）

避難している人の生活が以前より落ちついてきたため演奏活動を受け入れ易くなったこともあり、学校はもとより仮設住宅の集会所、地域の集会施設、病院・お寺・博物館・水族館、コープ、ホール等、活動の拠点がぐっと拡がりました。



2016年11月1日、石巻市「雄勝オーリンクハウス」で200回目のコンサート、川の上「百俵館」で201回目のスタートを切りました。雄勝地区は津波で全体の7割に当たる1100世帯の住宅が全壊。当時4300人の住人のうち243人が犠牲となった厳しい惨状のあった地区です。

「河北新報」に当日鑑賞した一関市の元小学校教員の方の感想があります。

「南三陸町で30年ぶりに同級生4人と再会を果たしました。翌日、被災した雄勝町のコミュニティ再生を目指して建てられた交流施設「オーリンクハウス」で休憩、置いてあるチラシを取ると、3日後に日本フィルハーモニー交響楽団の有志による「弦楽四重奏」が開催されるとあり心惹かれました。

11月1日92才の母を伴い、一関市から車で2時間かけ再訪しました。小さな建物の中に地域の方々が50名ほど集まりました。地域の方々に交じって美しい音色に耳を傾けました。

震災後日本フィルは市民や企業からの支援のもとにボランティア活動「被災地に音楽を」を開始し、その日がちょうど200回目の公演でした。理事長の「これからも音楽を通して被災地に思いを届けたい」という挨拶に感動しました。こうした地道で息の長い活動が復興の後押しになることを願ってやみません。」



3. 音楽でつながり、心揺さぶられ、可能性を見つける

震災当初から南相馬市の避難所等で演奏を行ってきた日本フィル。
2年目から市立原町第一中学校の吹奏楽部の指導を行い、阿部先生の熱心な指導に心打たれ特に集中して訪問、11年の絆をつくっています。

「あの日を境にあらゆることが変わりました。半分以下に減った部員の切なる思いに心動かされ活動を再開しました。

そんな私たちに日本フィルからクリニック（演奏指導）の話が舞い込みました。レッスンを受けて生き生きとしている生徒達の姿を見る事が出来、演奏はすばらしく、心動かされ、楽しさのあまりそれ迄張り詰めてた色々な思いが急速に溶けていく感じを味わいました。それが日本フィルの“被災地に音楽を”との初めての出会いでした」（阿部先生）

「春に出会いのクリニック、夏に夏休みコンサートへの招待、秋に演奏訪問(荻窪音楽祭参加)と次々と手を差し伸べ寄り添って下さいました。心は揺さぶられ、生徒の表情は変わり、エネルギーが満ちてきているのを強く感じました。

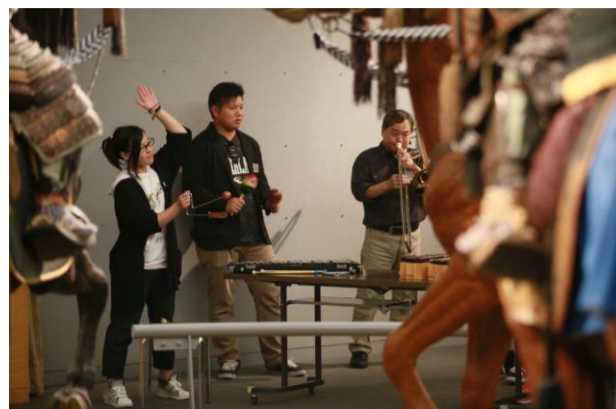
受身の生徒が多く表現力が低下してきていると話すと、マイケル・スペンサー氏のワークショップでジョン・ケージの偶然性の音楽手法で音楽をつくりあげたのです。子供達がどんどん変わっていき、その可能性の大きさを感じることが出来たのです。

震災で失ったものは沢山ありますが、私たちには音楽がありました。

音楽でつながり音楽で心揺さぶられ音楽で意欲が充実し、音楽で子供たちの可能性の大きさを見つけました。」（同）



●クラシック音楽と地域伝統文化のワークショップ



《騎士道と武士道》

南相馬市の博物館を舞台に地元の野馬追に代表される武士道と西洋の騎士道として代表されるR.シュトラウスのドン・キホーテを対比させる音楽創作ワークショップを行いました。

★映像：2017年10月15日福島県南相馬市博物館《騎士道と武士道》

《鎮魂と骸骨の踊り》

・大船渡市のリアスホールでは、地元の子供達が伝承している、平家の落ち武者の霊を鎮める赤沢の鎧剣舞を踊る子供達と、ハロウィンの真夜中、死神が墓から死者を呼び出し朝まで賑やかに踊り出すクラシック音楽、サン＝サーンスの《死の舞踏》をワークショップで楽しみました。郷土の伝統芸能と西洋音楽の共通のエレメントを引っ張り出して文化的に豊かな体験をつくるというものです。

★映像：

2018年8月9日岩手県大船渡市リアスホール
《鎮魂と骸骨の踊り》



4. 「東北の夢プロジェクト」を創設

打ち上げ花火のような華やかな活動はなく、線香花火を楽しむ、残りの小さな火だまが消え去る迄見入るような「被災地に寄り添い、忘れない。今を伝える」を愚直に実践してきました。

その間、被災地のニーズも大きく変化しました。直後からの「地域住民の心のケア」のニーズは変わりませんが、他に「文化芸術に触れる機会をふやせないか」「地域内外との交流を活発にしたい」「外部への情報発信をしたい」「人の集まる機会を増やしたい」との希求が年々強まってきたのです。

こんな時、沿岸部または「点」として各地に展開して来た活動を、「面」としてさらに発展させ、東北における文化レガシーとして活動を展開出来ないか、検討を要請されました。

★映像：2019年8月11日岩手県盛岡市岩手県民会館《楽しいオーケストラ》

オーケストラを中心に置き、クラシック音楽と地域伝統芸能・学校文化、内陸と沿岸、子供達と独居老人をふくめた高齢者、これらが一同に集い、子供たちの笑顔で復興を後押しする、新しい文化活動を創造し、コミュニケーションの場を提供する。子供たちの笑顔と未来にむけて頑張る姿、それを見守り応援する暖かい眼差しを各地に発信したいとの思いから「東北の夢プロジェクト」を創設し、活動に加えました。

その活動を通し、東北の津々浦々にある伝統芸能と地域を支える学校文化を舞台に上げ、日本全国さらには世界を視野に入れて活動していきたいと思っています。

2017年より文化庁委託事業に認定され復興庁の後援のもと岩手県のみならず福島県、宮城県でも展開する計画です。



5. コロナ禍を経て

コロナ禍で一時は楽団存続が危ういという所まで追い込まれた日本フィル、しかし全国の方々からの多額の寄付・公的助成等により何とか切り抜けることが出来ました。しかし、“被災地に音楽を”の活動は、人と人の接触・地域間移動が長期間制限されたため、300回を前に足止めをくらってしまいました。

全国大会・東北の夢プロジェクト等へ参加ができず、発表の機会を全く失った生徒達の為に行った、日本フィル演奏家との3時間にわたる対話イベント、「夏休みコンサート」へのオンライン参加。ライブビューイング、全国配信された生徒の表情からは暗さは消えて明るく輝き、かつてのエネルギーが復活したようでした。「ライブとオンラインのベストミックス」という新しい時代へのヒントを得ることが出来ました。



11年を経た今、福島をのぞく地域では被災地は死語か、と思える場面に遭遇することもあります。復興の後押しと風化させてはいけないものを両立させた活動が求められているように思います。

さらに、社会全体の問題である人口減少、少子高齢化、独居老人、地域文化格差、学校問題等がこの地域では一層増幅されています。

被災地に音楽を届ける活動は、地域に音楽を届ける活動に、使命を広げる時が来たのかもしれない。

我々は被災地から多くのものを学び、力をもらいました。この知見をしっかり発展させ、再び東北及び社会に還元しなければならないと思っています。"音楽家に何が出来るか"を、再び問い続けながら社会の要請に応えていきたいと決意しております。

★映像：2022年6月23日 宮城県石巻市雄勝町 雄勝小・中学校



あの厳しい被害を受けた石巻の雄勝地区に再建された雄勝小中学校をこの6月に訪問しました。奇跡の桜の壁画、唯一残った山桜の元に集う33人の子供たちを描いた新しいモニュメントの前で演奏することができました。

これが、311回目の演奏です。

ありがとうございました。

以上

第 16 回 後藤新平賞 授賞式レポート

このたび日本フィルは、第 16 回後藤新平賞を受賞いたしました。受賞にあたっては、日本フィルが東日本大震災の被災地における活動「被災地に音楽を」を継続し、さらにその活動が「若い世代への未来への希望を育てている」との評価を頂きました。そして去る 7 月 5 日(火)に杉並区の座・高円寺にて授賞式が執り行われました。



当日は後藤新平の会より青山侷明治大学名誉教授をはじめとする選考委員の 6 名の方々が登壇され、日本フィルからは理事長平井俊邦が登壇。後藤新平賞本賞、並びに記念の表彰楯とステンドグラス「祈りのシンフォニー」を賜りました。

受賞にあたっては、日本フィルが東日本大震災の被災地で継続している「被災地に音楽を」の活動が「後藤新平の奉仕の精神と人材育成に対する高い志に通ずる」との評価を頂きました。それに応じるかたちで、受賞者講演として理事長平井が日本フィルの被災地での活動と理念について、当時の映像や写真、被災された方々・演奏に赴いた演奏家の言葉を紹介しながらお話いたしました。

会場には震災発生後の 2011 年 4 月に初めて現地を訪問したメンバーも駆けつけ、受賞の喜びを分かち合いました。

後藤新平氏の足跡の下作られた志の高い賞をいただいたこと、また、長年続けてきた日本フィルの被災地支援活動に光を当てていただいたことに深く感謝いたします。また、活動を推進した演奏家をはじめ、支えていただいた皆様、現地でお会いした方々、復興に尽力されている方々にもこの場を借りて御礼申し上げます。

今回の受賞を糧として、日本フィルはこれからも東北地方沿岸部への取り組みを継続して参ります。そして「東北の夢プロジェクト」では東北地方各地の地域や学校で子どもたちが取り組む音楽活動・文化活動を広く紹介することで、子どもたちと地域の未来を応援していきたいと考えています。

今後とも日本フィルの社会への取り組みへのご理解とご協力をいただければ幸いです。



活動の記録

■ 日本フィルの被災地支援（YouTube再生リスト）

<https://youtube.com/playlist?list=PLCl-hzatBEFDSI3Xg5GXb6HPiQkUpL3AS>



■ 被災地レポート（随行スタッフによる訪問の記録）

<https://japanphil.or.jp/orchestra/news/4727>



■ 被災地に音楽を～被災地の移り変わりに心を寄せた10年300回の記録～



■ これまでの訪問回数 315回（2022年7月15日現在）

■ 2022年度の訪問

2022年6月21～23日 宮城県石巻市 弦楽四重奏

2022年6月26日 岩手県盛岡市 弦楽四重奏

2022年7月6日 岩手県北上市 合唱指導・ワークショップ

2022年8月12日 岩手県盛岡市 東北の夢プロジェクト2022楽しいオーケストラin岩手

2022年10月7～9日 福島県南相馬市 吹奏楽指導・コンサート

2022年10月12日 岩手県宮古市 オーケストラ・キャラバン

2022年11月12日 福島県田村市立要田小学校 コンサート

2023年1月8日 福島県郡山市 東北の夢プロジェクト2022 in福島

ほか、年度末に東京にて事業報告会を予定

2022.8 日本フィルハーモニー交響楽団